

515) 手拭い

猫を飼うようになってからというもの、毎朝5時に猫に起こされるため、小生はかなりの早起きになってしまった。起きてからやむなく草むしりをしたり、花の写真を撮ったり、最近ではすっかり朝人間になってしまって、朝は結構忙しい。出勤する前だから髪が汚れないように、頭には赤い文字で染め抜かれた祭りマークのきりりと入った手拭いをかぶって、我ながら良く働くのである。ところがその日は幸運と言おうか不運と言おうか、女房殿は実家に帰っていて、小生は一人暮らしを満喫しているところだったのであります。さて時間が来たので、庭いじりをそこそこ切り上げて、洋服を着替えて、駅へ向かったところまではよかった。電車に乗って上野まで行くとオシッコをしたくなかったのでトイレに行き、そこで鏡に映る自分の姿を見て、腰が抜けるほどびっくりしてしまった。何と祭りの手拭いをかぶったままの格好ではないか。それにしても今までのれ違った幾千もの人たちはこの祭り手拭いの親父を、いったいどう思っ見ていたのだろうか。しかし会社までこの格好でなくて良かった。それだけがせめてもの救いだったのであります。